クリノリン衣裳複製についての一考察

石 橋 設 子、山 本 政

Ⅰ．緒　言

地球上に人類が誕生し、その長い歳月の中で、人々は様々な被服生活をしてきた。中でも衣服は、個性の表現をし、家庭生活や社会生活をも反映してきた訳である。そこで、被服生活を考察する上では、人間の全領域いわば世界的視野から捕えることが、必須の条件であると考えられる。換言すれば、世界各地の気候の違いや人間個々の肉体的・精神的な内的思想の相違、また、それぞれの時代の政治や経済等多面的に影響していると思われるからである。例えば、日本の洋装文化が急激に発展したきっかけは、明治初年日本の為政者達が外交を始めたそのことに、起因していると云っても過言ではなかろう。

ともあれ、衣服は人間が生きて来たプロセスを最も良く表現していると云えよう。逆に、各衣裳にはその時代を偲ばせる服装のデザイン的変遷を見ることが出来る。それらの事柄について、服飾の史的研究をするうち、西洋服飾の複製に思いを寄せた。そこで、現代の素材と縫製のテクニックを用いて独自の方法で、クリノリン衣裳の再現をすることにした。複製をするドレスは、Fashion platesに掲載されている一枚の絵で、コムト＝カリックス・プレヴァル刻のイブニングドレスであり、写真１がそれである。

この原画を選んだポイントは、華麗なデザインでクリノリンの特性を備え、当時を代表するような作品であること。また着用するにあたり、サイズの近似していることなどを念頭においた。そのほか製作年代についても幅を持たせられる様に考慮した。当時の西洋婦人の身長は163cm～196cmと大変高かった様であるが、製作者が靴をはくとその平均値に近くなる。また胸囲寸法及び腹囲寸法は、それぞれ１cmの差であり、腰囲寸法は同寸であることから、洋服のバリエーションを構成する３つのポイントが、ほぼ一致した寸法である。このように当時の体型に大変近いことから、実際に着装し、機能性を確認出来ると云う利点もあり、複製についての一考察をすることにした。

写真１　コムト＝カリックス・プレヴァル刻
（イブニングドレス）

Ⅱ．研究方法

１．19世紀クリノリン衣裳の服飾史的考察

1848年から1870年のクリノリン衣裳の形成と発展について歴史的背景から考察すると、政策と経済の関係が寄与することが大きい。中でも当年代は工業の機械化の促進、対外貿易の進展のもたらす決果として、贅沢なくらしが満喫できる状態にあったと云えよう。このような社会史から、フランスの服飾とその展開について、女性の服装を総括してみると、その概要は次のようである。

１）女子の服装の特色

第二帝政時代織物工業が発展し、染色技術が進歩した事により、布地や装飾上において、限りなく変化に富んだ趣向が加えられるようになった。こうした新しい技術の進歩は、経済の繁栄となり、そのまま、服飾の華美を産んだ訳である。殊にフランス宮廷が、一層文化的イニシアティーヴを取るようになった。複製にあたって、当時のイブニングドレスのデザインに、焦点を絞り考察すると、トップ部分ではネックラインを水平のように広く明け、S･N･

Pを肩峰点迄繰った。また、それよりも繰り下げるなど、肩をあらわにした。このような広い明きのネックラインには、フリルやプリーツ、或はレース等をつけて、袖の方まで垂らし、ボディスを飾った。また、スカート部分は、クリノリンに支えられ膨大なものとなった。いわゆるクリノリンスタイルと呼ばれる衣裳が出現した訳で、1860年にはドレスの蹴回し寸法が9メートルに達したそうである。

こうしたクリノリンスタイルの巨大化に伴って服装生活に豪華さや貴族的雰囲気が盛り上げられて行った。尚、身分制度の解放と相俟って、特権階級だけの衣裳の着用が一般市民へと広まった。その為に流行は拡大され、華麗な衣裳は最高潮に達したと云えよう。

2）女性の下着と体型

スカートを大きく脹らませるクリノリンは、形や構造上の種類が多く、これらは年代により変化している。流行のデザインは、釣鐘状に始り濾斗状へ、60年代は前面は脹らませず、後方のみ脹らみを持つようになる。又構造上、縫製上、材質上などによる、パニエの代表的なものに、鳥かご型クリノリンいわば輪骨入りのペティコートがある。他に馬毛入クリノリン・綿布製クリノリン・馬毛入り布襞飾り付クリノリン・鳥かご式下部布付クリノリンなどがある。これら、クリノリンを用いる様になり1850年から1860年には、コルセットに影響を持たらした。それはコルセット自体が短くなり、布をプリンセスラインに接ぎ合わせたり、裆付とする手法を取り入れるなど、身体にフィットしても圧迫を加えない様に工夫された。また、着脱にも便利な縫製がされるなど新技術の開発がされ、フランス文化の開花、その結実期にふさわしい服装上の長所が種々産み出された。しかし、クリノリン自体は自分で着用出来ない、機能面での欠点を抱えていた訳である。

2．パニエ及びクリノリン衣裳の複製について

原画を基にイブニングドレスの構成に対する検討を行う。先ず、原画の分析を行い、その構造図を模索し、立体裁断における予備知識として、製図、裁断などの予想を立てる。それを基にしてクリノリン衣裳の複製の施策案とする。また、パニエを製作し着用者のサイズに合ったスタンに着装させ、ブロードによる立体裁断を行い仮製作のドレスを縫製する。着装し検討の後、ドレス布地によるドレーピングにはいる。

Ⅲ．構成方法と縫製及び考察

1．イブニングドレスの構成に対する検討

1）原画の分析

画家の視点から原画の分析を行った。この絵（写真1）のイブニングドレス着用の婦人の

顔を見ると真横を向いている。ドレスを見ると胸もとのバラの花、スカートの上の緑色の花弁形飾り布（以後飾り布と略称する）の正面が、少しこちら向きである。以上の２点から考察しても、この絵は右前方から見て描かれたことがわかる。そこで見えている二枚の飾り布の位置を設定すると、前中心にあたる飾り布は、図の右から1/4の位置、右サイドに当る飾り布は図の左から9/34の位置であり、図１のような花弁形に区切られていると思われる。

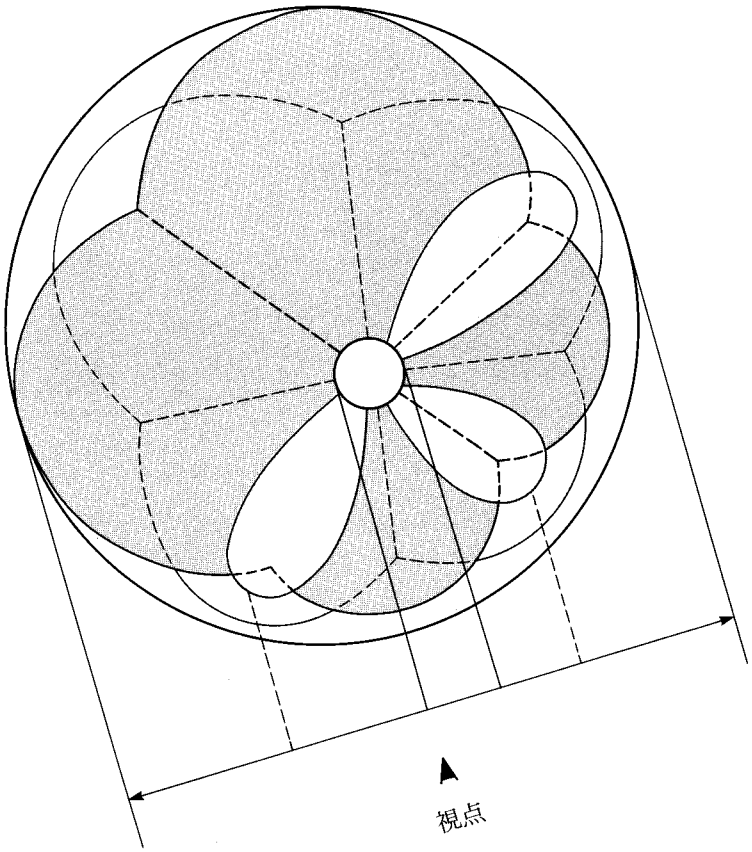


図１　スカート部分の平面図

2）構成に対する施策案

(1)　原画における寸法の割り出し

身長を175cm（7cmの靴をはく）とし、絵の婦人と同寸と考え、身長を基準に比例計算で各部位の寸法を算出した。図2の通りである。

円周＝549.5

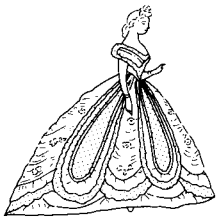
※ 数字の単位は全てcm
（　）内の数字は原画の実寸法
（　）外の数字は割り出し寸法

図2　寸法割出し図

(2) 着装から検討した構造図の設定

既にスカートの平面図を想定した通り、縫製的見地からもスカートは3枚重ねであり、その上に飾り布がスカートの一部の様に取り付けられている。当然、これらの布の重量や形状を支える、当時のクリノリンに値する様なパニエが必要である。そこでスカートを主とした全体的な構造は図3のように考えられる。

図3—1はパニエで、図3—2はスカート丈の基準となるアンダースカートaで、ウエストにギャザーを寄せる。図3—3はアンダースカートbで、オーバースカートの花弁の隙間から視かれるように構成する。図3—4はオーバースカートで、量感のあるドレープの為に前後中心と、左右に襞づけをして引き上げる形。図3—5は飾り布でオーバースカートの前中心と、左右の引き上げ部分を覆い隠すように取りつける。



着装図

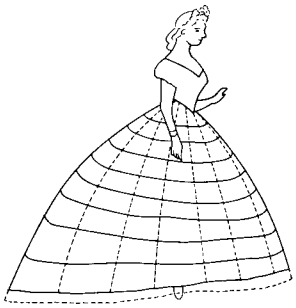


図3—1 パニエ

図3—2 アンダースカートa

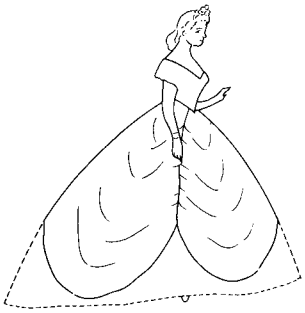


図3—3 アンダースカートb

図3—4 オーバースカート

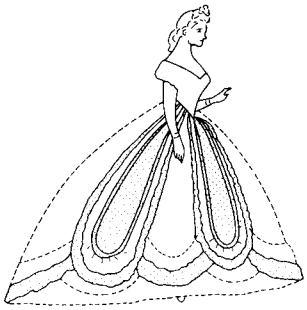


図3—5 飾り布

図3 着装及び構造図
(スカートを主にした図)

2．クリノリン衣裳の複製

1）複製の考案

(1)　型紙による製作案

立体裁断導入への予備知識として、原画から割り出した寸法を基に、ドレスのプロポーションからうける予想を製図に表現する。それにより要尺も見当出来る。そこで現代の素材を用いて独自の方法で完成させるための、ドレスの予想製図を行うことにする。

(2)　ドレスの予想製図

トップ（身頃）部分

身頃は胸囲91cm、背丈39cmの寸法で文化式原型を作図し、これをもとに製図を展開する。図４－１のように、衿刳を大きくあけ、ウエストラインの前中心を鋭角のＶ型とする。

図４　ドレスの予想製図

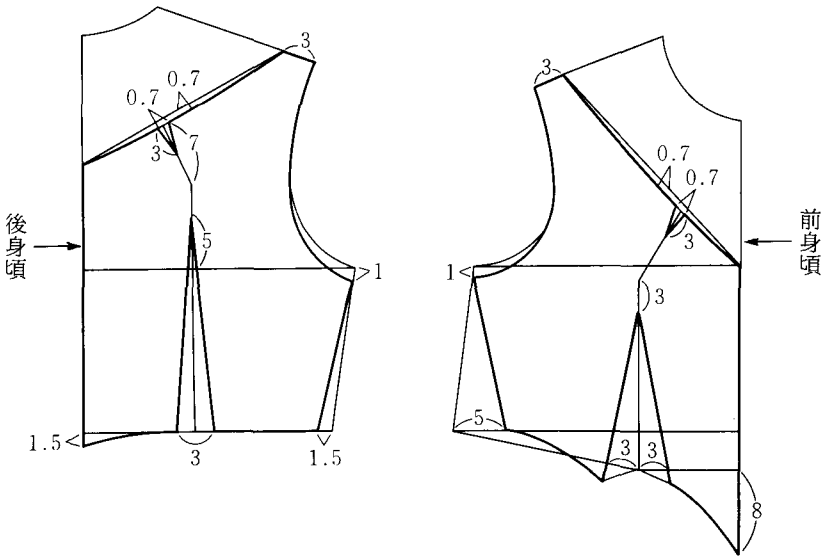


図４－１　トップ部分予想製図
（文化式原型使用）

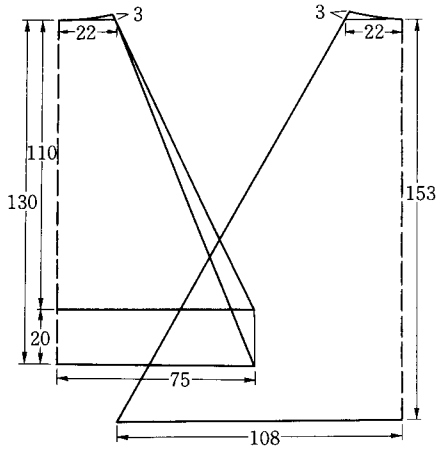


図4—2 アンダースカートa

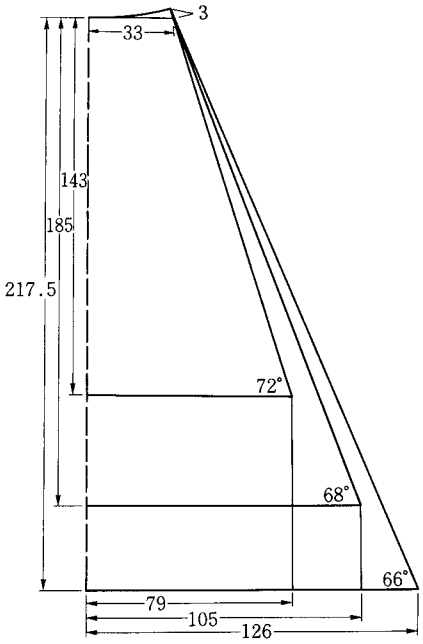


図4—3 アンダースカートb

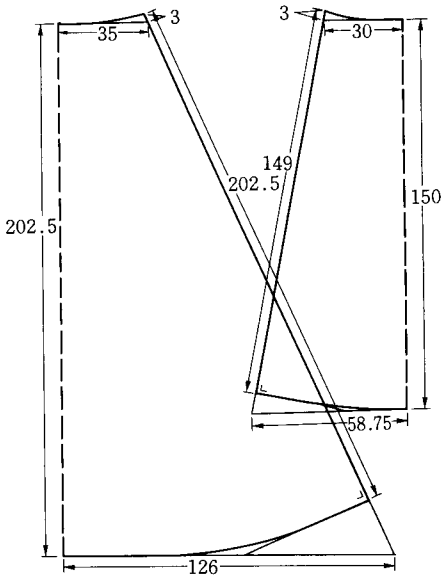


図4—4 オーバースカート

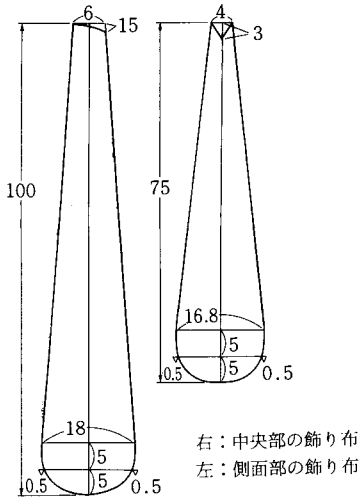


図4—5 飾り布（縁タフタ）

スカート部分予想製図

スカート（下半身）部分

スカート及び飾り布の製図は図4に示す通りである。図4－2アンダースカートaは、6枚接ぎのギャザースカート。図4－3アンダースカートbは、デザイン上オーバースカートが基本となるドレープ形態の為、丈を1.5倍、幅を2.5倍位に想定する。またオーバースカートの隙間から視かれるドレープ部分の丈の一番長い所が、アンダースカートaより10cm位上とする。図4－4オーバースカートは、前2枚・後2枚のドレープした布で構成され、左右対称の形であり、見積りの難所である。原画の割り出しで寸法を設定したように、ドレープの寄った状態で、前の最大幅74cm、後の最大幅84cm、前スカート丈100cm、後スカート丈135cmを指標に、ドレープによる引き上げ量と幅のゆとり量を考慮し、丈を1.5倍、幅を2.5～3倍に算出する。図4－5緑タフタの飾り布は、オーバースカートの引き上げ縫合位置を隠し、スカートの三枚重ねのボトムラインと融和する形状に製図をする。

2）パニエの製作

(1)　パニエの製作手法の検討

19世紀当時のパニエは、馬毛や、鯨のヒゲ、ぜんまい、針金、鋼鉄等で窮屈なまでに形成されていた。しかし、本製作ではこのパニエを現代の素材を用いて、然も、被服自身の動きを表現出来るように、縫製上のテクニックを検討した。パニエは云う迄もなくシルエット作りの基になる。殊にクリノリンドレスのプロポーションを確認する上では、仮製作当初から必要である為、先にパニエの製作をする。

(2)　素材・構造・製図・裁断

①　パニエの土台

素材は、張りのあるパンプ（ナイロン100％）を用いて、5枚接ぎとし、ウエストにインサイドベルトをつける。構造は、骨格として、直径1.6㎜の針金を円錐形に10本入れ、直径1.9㎜の針金を円形に4段、前中心でほぼ等しい間隔に入れる。図5のa・b・cの通りである。

製図及び裁断については、次のように考える。パニエの直径を、ドレスの直径からフラウンスの脹らみ分15cm位を考慮した160cmに見積る。そこで蹴回し寸法は、160cm×3.14＝502cmの式で算出される。しかし、使用する材料の布幅が1mのため、接ぎ合わせ縫代を1cmとすると、パニエの直径は、{(100×5)cm－(1×2×5)cm}÷3.14＝156.0595cmと算出され、見積り寸法より少し小さめとなる。それで、パニエの土台布の形態は、ウエストに1.5倍のギャザー分量をとり、裾はひとまず布幅いっぱいにし直線で結ぶ。図6のような製図となる。裾線は先ず直線のまま裁断し、ウエストを基準に、釣合いを平らに縫い合わせ、各スカート布5枚を縫合する。そこで、ボトムラインが滑らかな曲線を描くように訂正しながら裁ち落す。

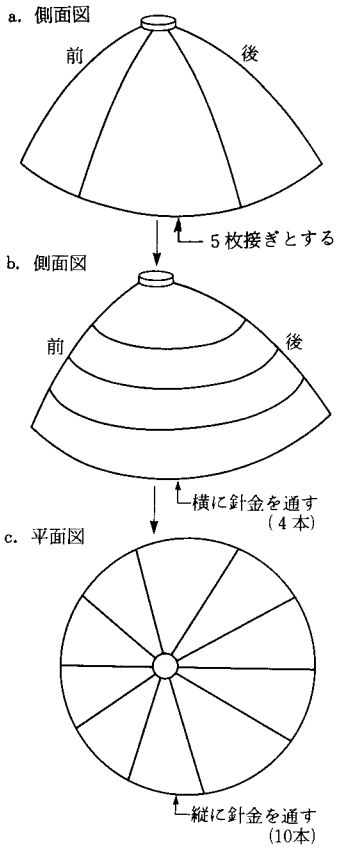


図5 パニエ土台布構造図

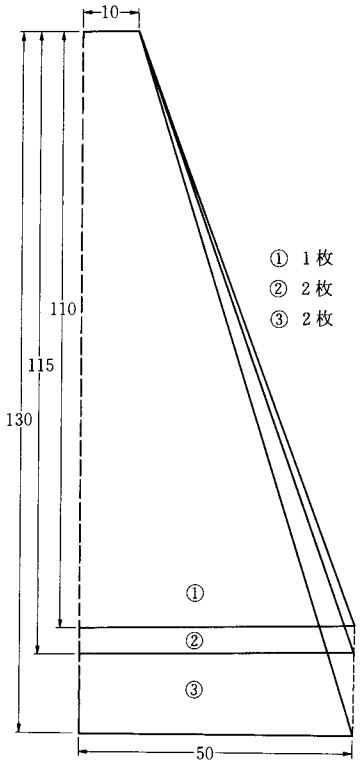


図6 パニエ土台布製図

② フラウンス

素材は、ハードチュールのソフトなものと、硬めのものと2種である。構造はギャザーをたっぷり寄せたフラウンスを4段、更に硬いハードチュールのフラウンスを、中3段の針金位置につける。図7のa側面図に見られる様に寸法の設定を行った。尚、b平面図の様に縦の針金を入れる方法をも示した。また、図8のように折り返し分の山にギャザーを寄せ、台布に取りつけ、フラウンスの脹らみを強調する。そのために図9のように裁断することになる。

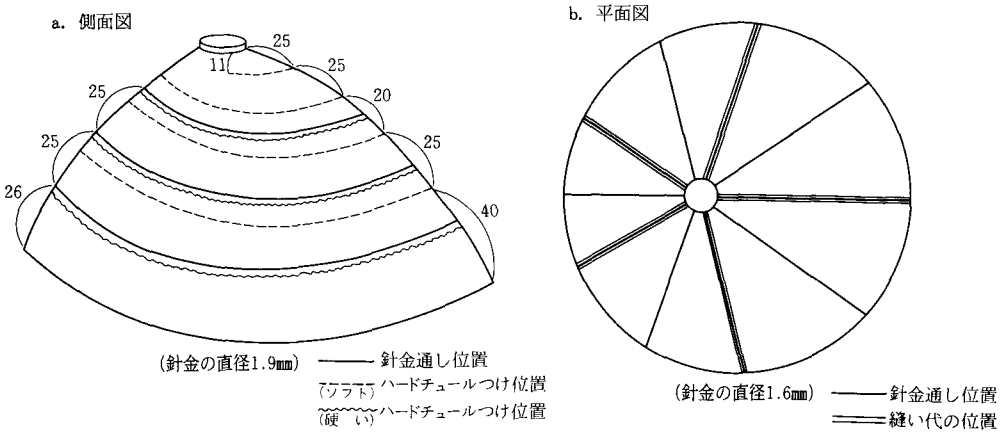
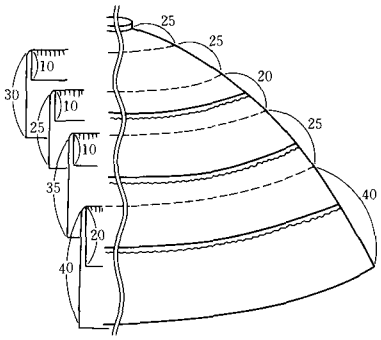


図7　フラウンス及び針金通し位置の設定



フラウンスの折り返し分（短い方）を内側になるように台布に縫いつける。

図8　フラウンスのつけ方

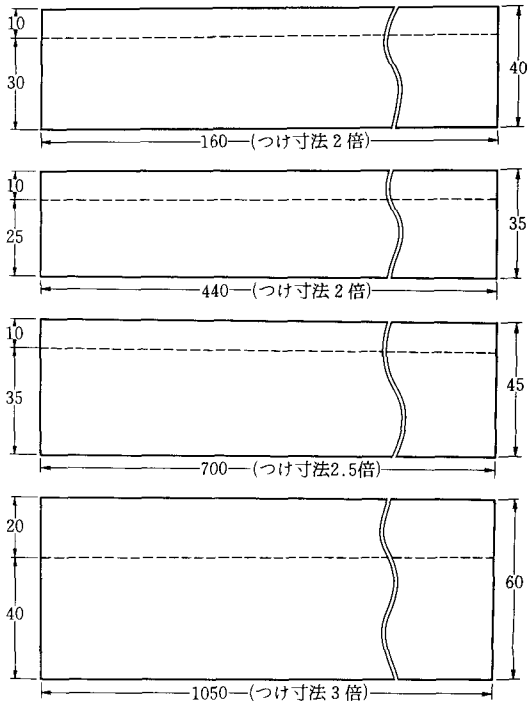
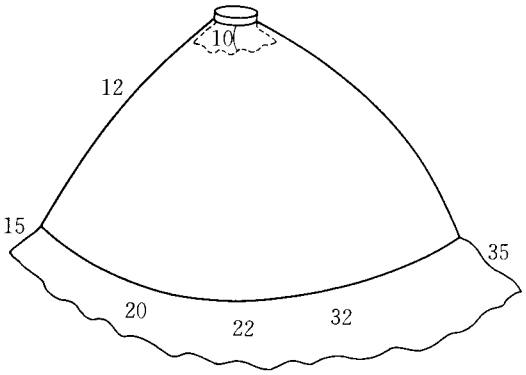


図9　フラウンス裁断

③ フラウンスの覆い布

フラウンスの形態がドレスに響かないように、オーガンジーをかぶせる。オーガンジーは緯布を布幅いっぱいに使用するため、フラウンスの脹らみの多い、うしろは丈が不足する。これをフリルで補う。図10のaが構成図でありbは裁断図である。

a. 構成図



b. 裁断図

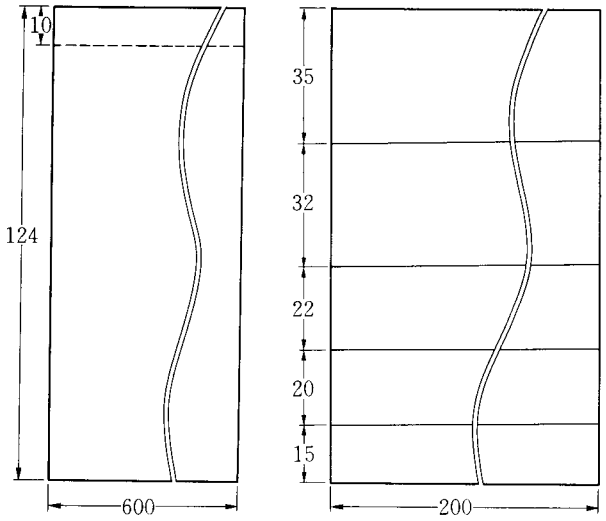


図10 フラウンスの覆い布

(3)　縫い方要点

まず土台を作る。布５枚を接ぎ合わせ、ウエストラインの1.5倍のギャザー分を始末し、裾線を訂正した後１cmの３つ折りにする。緯の針金位置では裾の１ケ所、経の針金位置では接ぎ合わせ位置の５ケ所を利用し、針金の通り路を作る。そのほか横３本と縦の５本は平織のコトンテープを縫いつけて針金通し路を作る。この縫製の際に、布の経、緯の交錯点で針金通り路がふさがらないように工夫をする。

フラウンスつけは、ソフトなハードチュール、硬めのハードチュール共、ギャザーを寄せ各段毎に、つけ位置の寸法よりわずかに緩めに設定し、ミシンをかける。ギャザーで厚くなるので縫合に注意する。

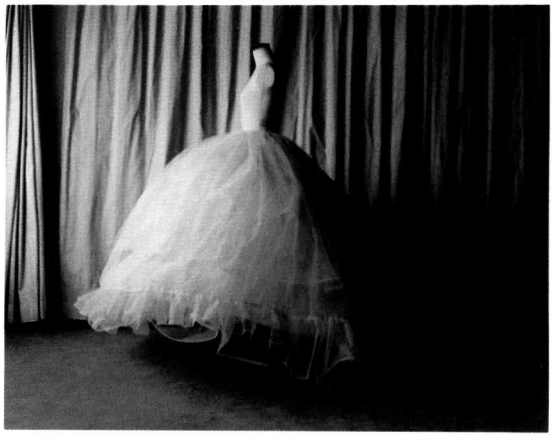


写真２　パニエ

(4)　試着・補正

パニエの土台は、仮縫い合わせ後試着したらイメージ通りであった。そこでフラウンスをつけ、写真２に示すように完成をしたわけである。全体を良く観察すると脹らみや大きさは、ちょうど良いがサイドの写真が示すように前がはね上った為、その検討を行った。これは後に脹らみを多く持たせる為に、フラウンス量が後に集中していることから、重みで後が下りぎみになるものと思われる。そこで、改善策として着装者とパニエの空間を埋め、クリノリンを固定しようと考え、アンダーパニエを追加製作することにした。

３）アンダーパニエの製作

(1)　素　　材

パニエと同じく土台布には、パンプを使用し、フラウンスは硬いハードチュールのみ使用した。

(2) 土台布の製図と構造

下肢部の中で、運動に作用する大腿部の位置、つまりパニエの上部空間が埋められると、パニエは固定される。そこで、土台の丈は短くして、フラウンスのフリル分量を、縫製可能な限りに多くし、ボリュームのあるシルエットを構成する。着脱のためのあきは、パニエが後あきの為、アンダーパニエは前あきとし、重なりを避ける。図11—aは台布の製図であるが図11—bはフラウンスのつけ位置及び裾の縫製方法を示したものである。

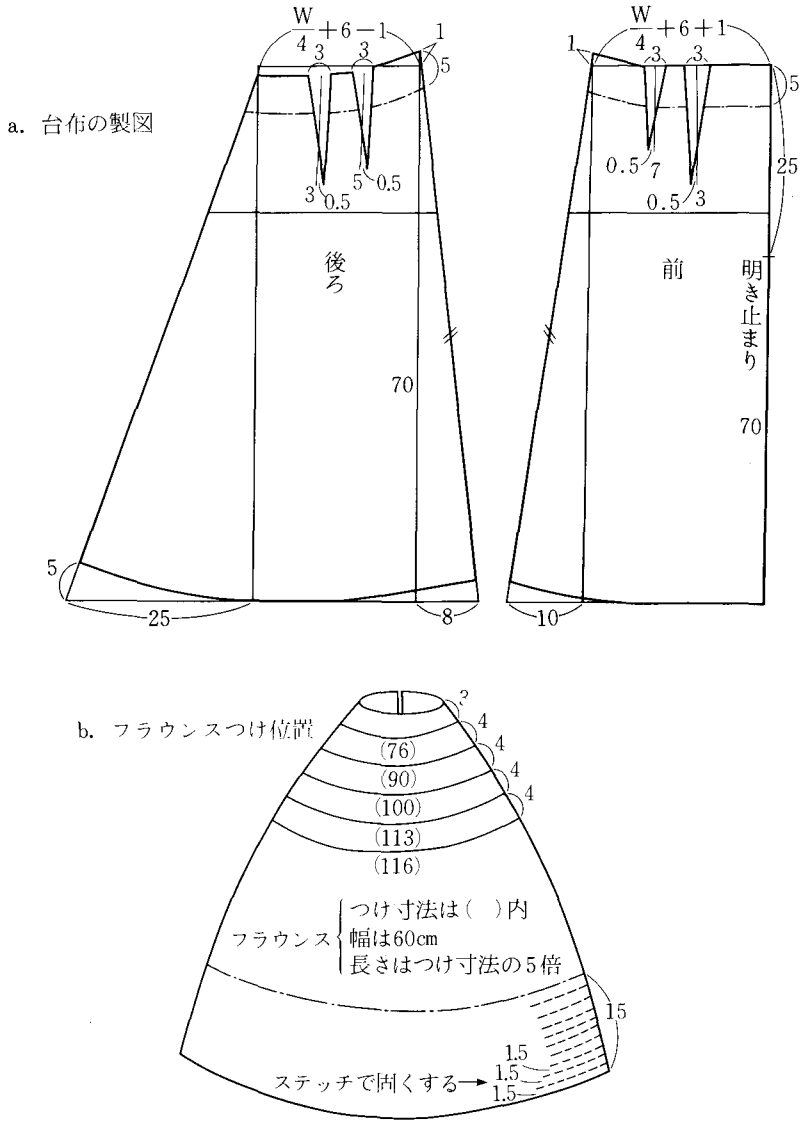


図11 アンダーパニエの製図

写真３　アンダーパニエ

(3)　縫　　製

アンダーパニエの土台布は、始めに製作したパニエと異なる点が、前明きとしたこと、また、これを突き合わせに縫製すること、及び裾に15cmの見返しをつけ1.5cm間隔でミシン縫いをし張りを出すことである。また、フラウンスのつけ位置は、大腿最大幅位ぐらい迄とし、ギャザー分量は５倍と極めて多くする。そのためにミシン縫いは容易でないが、フリルのつけ方、ミシンのかけ方に細心の注意を払いながら縫製した結果、写真３の前面・側面・後面が示すようにイメージ通り製作できた。

(4)　パニエの重ね着の検討

改善策として製作したアンダーパニエの上に、最初作成したパニエを着装したのが写真４である。尚、後面の写真は覆い布（オーガンジー）をはねてフラウンスの縫製を示したものである。これは、実際に着装し動作実験を行ったが、その結果動的姿勢の場合も、写真と同じ着装状態であった。この保形性のアンダーパニエの製作によってボリューム感と固定感は共に改善された。

４）立体裁断による仮製作

(1)　立体裁断の行程

①　人台と素材

体型に最も近い文化型スタン10号（バスト91・ウエスト67）を使用する。ウエストの差が0.5cmのみの為ボディーの補正はしない。素材はブロードの白とブルーの80番手を使用する。

②　ドレーピングの概要

トップ部分……前身頃は、前丈に縫代分を見込んで引き裂いた布に、あらかじめ前中心と、バストラインを印す。それを基にバストの脹らみが眺げないように、肩が落ちないように、ウエストがすっきりするように等考慮しながら、ダーツや、切込み、またはカットするなど布

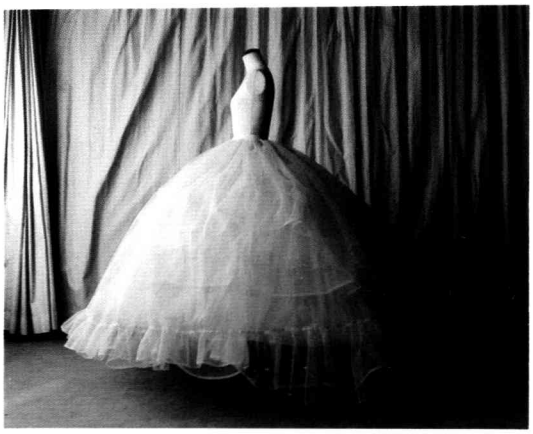


写真4　アンダーパニエとパニエを重ね着装

地の物理的な性質を利用して処理をする。後身頃も同様である。

スカート部分……全体的なプロポーションを摑む目的で、オーバースカートのみ立体裁断を行い、仮縫製を行う。ドレスに使用する布幅が115cmのため、その寸法に調節したブロードの両端を、2cm位の針目で縫い、糸を引いてドレープを形成する。ピンワークで更に調製して美しいドレープの状態を見定めてから、布に10cmの餘裕を残してカットする。後スカートも同様に行う。飾り布のつけ位置、大きさのバランス等もみる。

③　立体裁断に対する考察

トップは、予想通りの感覚でドレーピング出来たが、スカートは想定通りにならず、後ろ布の中央をシャーリングの技法で引き上げた所、美しいドレープが形成された。

(2)　仮縫い合わせ

トップのダーツの縫い代は、前・後それぞれ中心向けにし、肩や脇の縫代は前身頃側に片返しにする。衿刳りにフリルをつけ、本製作時のレース（装飾衿）のイメージにし、尚伸び止めを兼ねる。スカートはドレープを寄せて接ぎ合わせる。裾にはレース代りのフリルをつけ、後スカートの中央はシャーリングにする。飾り布3枚を想定した上で、前中心の一枚のみ作り、

写真５　立体裁断による仮製作試着

オーバースカートに止めつける。最後にウエストを接ぎ合わせる。

(3)　試着・補正

仮製作における立体裁断は、左半身を主に行い、仮縫い合わせを行った後試着した。写真５に示す通りである。全体的に良いと思はれるが後身頃の衿明きのＶ字が少し開き加減で補正をする。

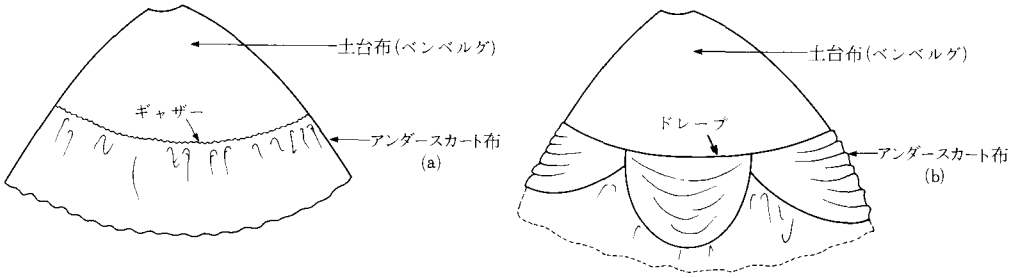
(4)　仮製作に対する考察と改善案

このイブニングドレスのスカートは、三枚重ねであるが、仮製作のためオーバースカート一枚で試作をした。それにもかかわらず、かなりの重量である。先に述べた構成図、図３のように縫製すると、トップ部分の形ちが、スカートの重さで崩れる。また、ウエストの接ぎ合わせ縫代を吟味しても、改善の必要がある。そこでアンダースカートａとアンダースカートｂの簡略化を検討し、隠れる部分の素材と構造を図12のように考えた。図に示すようにアンダースカートのａ・ｂとも別布をつけ、見える部分のみスカート布で、ドレープやギャザーを寄せ、重さを押えることにした。

５）イブニングドレスの製作及び装飾品

(1)　素　　材

製作するイブニングドレスは、ドレープの美しさが第１のポイントであり、適度の厚みと柔らかさ、また一方では、クリノリンのスカートに見られる豪華さを



アンダースカートa　　アンダースカートb

図12 改善策のアンダースカート

表1 イブニングドレスの素材・要尺・単価

パーツによる区分		製品名	繊維	布幅(cm)	要尺(m)	単価(円/1m)
全体表地	トップ オーバースカート	サテンスエード	ポリエステル (100%)	115	11	1,600
アンダースカートb(見える部分)		サテン風ジャガード(バラ地模様の地紋)	ポリエステル (100%)	112	5	1,600
アンダースカートa(見える部分)		シルクシャミー	ポリエステル (100%)	90	6	780
土台布	アンダースカートb アンダースカートa	ベンベルグ	レーヨン (100%)	90	7	250
飾り布(三枚)	表	ズーラタフタ	アセテート (56%) レーヨン (44%)	90	1.5	4,700
	裏	ベンベルグ	レーヨン (100%)	90	1.5	350
	装飾用	ブレード	レーヨン (100%)	1.7	6.3	450
	装飾用	チュールレース 黒	レーヨン (100%)	22	24.2	810
		チュールレース 白	レーヨン (100%)	15	24.8	810
衿(フリル)		チュールレース 黒	レーヨン (100%)	17	3.3	810
		チュールレース 白	レーヨン (100%)	10	3.2	360

更に強調する光沢が必要である。そこで、布の組織や、糸密度、厚さなど布の諸元について、細かく検討した。また3枚の飾り布もプロポーションの上から、極めて重要なポイントである。この細長い花弁の形ちを保つためには、布の張りが必要な上に、装飾用のレースや、点々と散りばめられたピンクのコーサージュとも調和が要求される。そのために幾つかの素材を

用いて一部ピンワークを試みるなどの方法をとった。表１に素材と要尺及び単価の概要を示した。

(2)　ドレス布による立体裁断の要点

トップは……ブロードによるベーシックパターンを基に製作する。

スカートは……布の使用量が多いことと、ドレープが主体のためにドレス布の材質の違いが多大な影響を及ぼす。そこでドレス布を使って新たに立体裁断を行う。先ずボディーにパニエを着装させ、オーバースカートのピンワークを行う。仮製作における立体裁断から得た適格な分量を想定して、まず布を台形に裁ち、シャーリングを併用して布を引き上げ、ドレープを形成する。またアンダースカートａ・ｂの土台布は共に裏布を使用し、６枚接ぎとする。この場合土台布の裾はパニエの脹らみをつぶさない程度の寸法を考慮する。尚、ウエストに最小限度のゆとりを持たせ、ウエスト寸法の余り分はタックで始末をする。アンダースカートｂは、まず土台布にオーバースカートの裾線を写し、その隙間から見えるアンダースカートｂの位置も印し、一方、ドレープを形成したアンダースカート布ｂの形状を確め見栄え良く縫合する。アンダースカートａは，オーバースカート及びアンダースカートｂの裾線を、あらかじめ土台布に印し、ギャザーを寄せたアンダースカート布ａを三枚重ねのスカートの裾線が落ちつく位置に縫い合わせる。飾り布は仮製作時における立体裁断済みのものを応用する。

(3)　立体裁断の展開図

トップは、仮製作時におけるベーシックパターンを用いて製作を行ったので、図13―１の

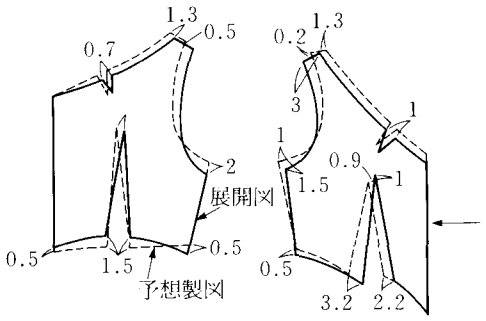


図13―１　予想製図と立体裁断の比較
身　頃

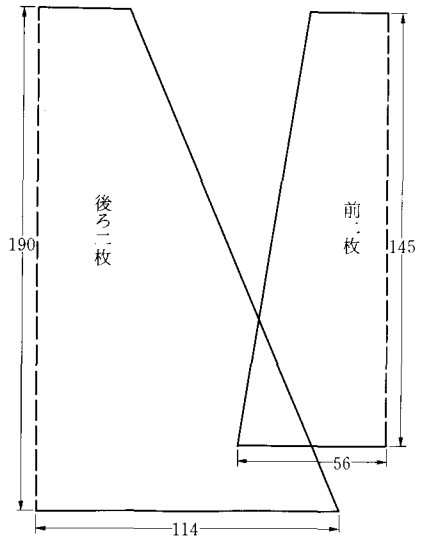


図13―２　オーバースカート展開図

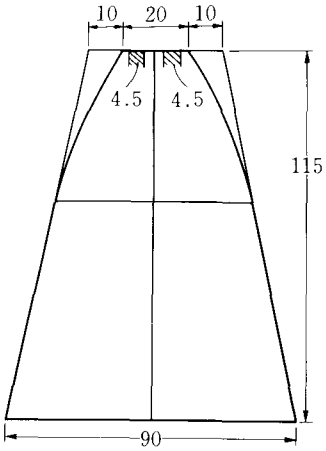


図13―3 アンダースカート土台布展開図
(6枚接ぎの元型)

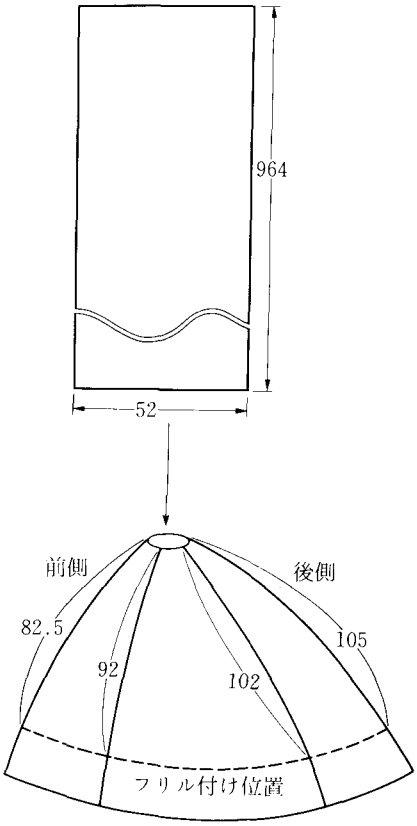


図13―4 アンダースカートa展開図

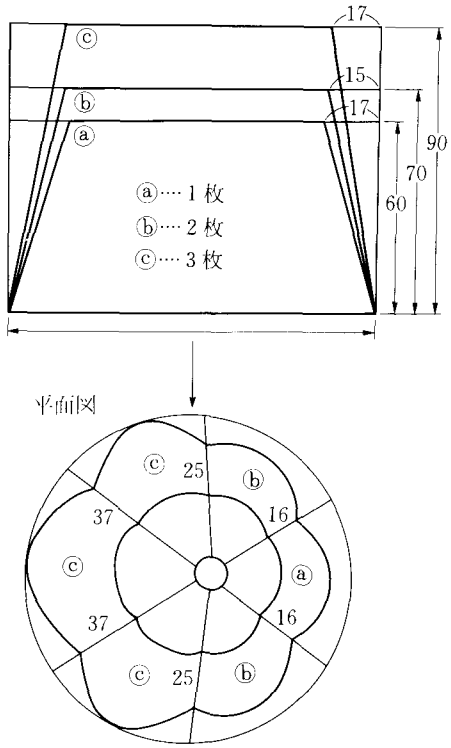


図13―5 アンダースカートb展開図

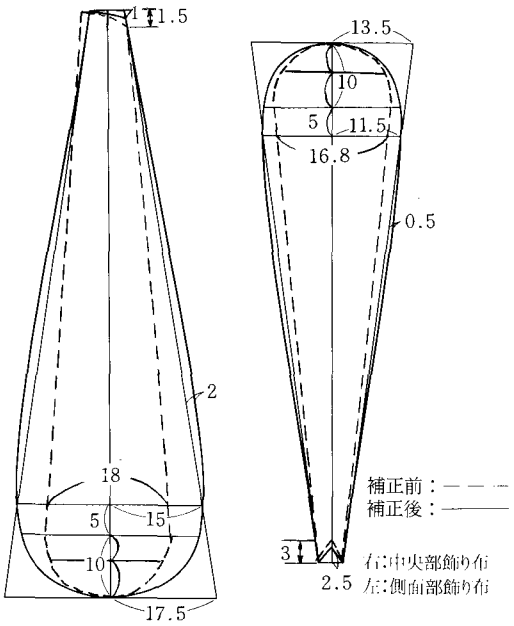


図14　飾り布展開図（補正）

ような検討ができた。スカートは、ドレス布地によるピンワークであり、ブロードによる仮製作の試作時とは微妙に変化した。その展開図は図13―2～図13―5に示す通りである。

(4)　仮縫い要点と試着及び補正

仮縫い合わせは、ぞべ糸及び絹縫糸を主に使用し、仮製作と同じ要領で縫合した。写真1のイヴニングドレスの着装状態に近似させ試着し、原画と見比べるとほぼ良いと思われる。写真6の示す通りである。飾り布は少し細くなった様であるが、これは仮製作時はブロード80番であり軽かった。しかし、本製作のズーラタフタの布は重いので垂れて幅が狭く感じられ、加えて原画が斜から描かれている点で、割り出し寸法と実寸の誤差が強調されることになったものと思われる。そこで飾り布の型紙を、図14の様に大幅に補正した。

(5)　本縫い

ドレスの本縫いは省略し、この項の末尾に完成着装の写真を原画と対象させたい。髪飾りやコーサージュは、原画に見られるように、タフタの飾り布の緑や、チュールレースの色に調和し、ドレープの陰影にも美しく映えるものが良いと思う。そこでシルクオーガンジーの布をピンクのぼかしに染色した。その濃淡のある布を用い、花弁の異なるバラを作成し装飾することにした。写真7に示す通りである。

Ⅳ．総　　括

西洋服飾の複製を行う事は、史的研究・技術的要素・縫製科学等と多面的な因子を持ち、困難が予想され、それらの事柄を如何に解決するかが重要なポイントである。勿論、当時の文献が第1の資料である。それにも拘らず現代の素材と技術を用いて、複製をしようとする、目的そのことが、大きな懸念であった。しかし、複製のドレスを選択するに当って、着装を対象とすることを大きな要因として決定した。その決果文化型スタンの使用も可能で、ピンワークしやすくなり、立体裁断と平面裁断の併用ができた。一方においては、モードの歴史

写真６　イブニングドトレスの仮縫

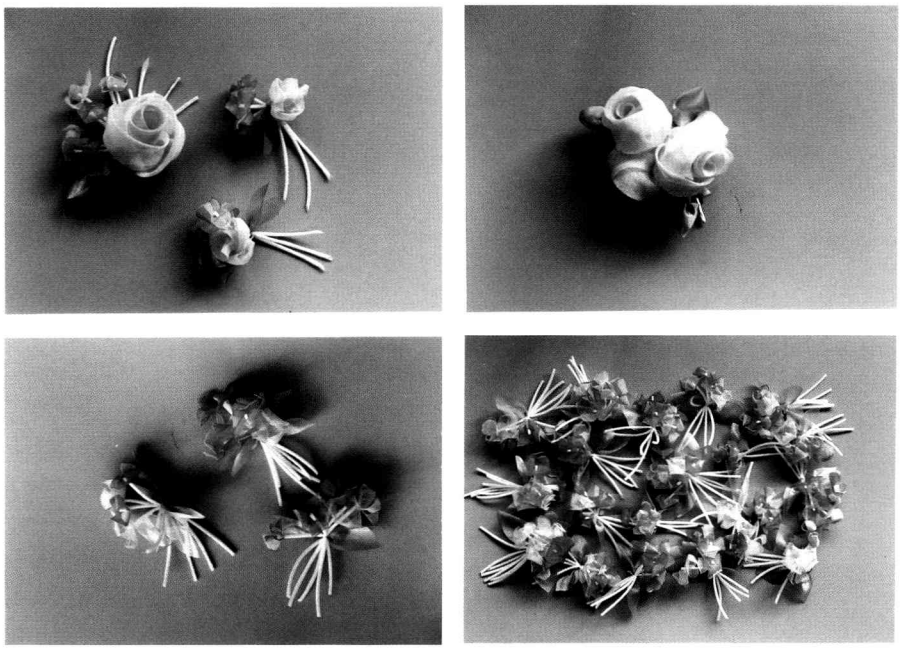


写真７　装飾品（髪飾り・コーサージュ）

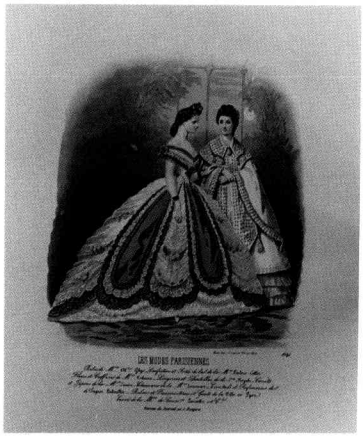


写真８　完成着装と原画の対象

に見られる蹴回し寸法を指標に比例計算により、ドレスの予想製図を行った。こうした事が、造型に対する布の使用法、寸法の適格さ、バリエーションの摑み方など、的確な量感を速やかに、表現出来る感覚を把握することになった。延いては、立体裁断の予備知識となり得たのである。そのことは、製作過程に於て、見積りの難所と思われる各部位が、仮製作や本製作の仮縫試着に於て、補正が極くわずかであったことが何よりの証左である。

またクリノリンは、縦10本横４段の針金の通り路を作り試着実験をしたが、横のみで原画のイメージは再現でき、座ることも可能であった。然し、動作によってはパニエが不安定になる事から、改善策としてクリノリン保形性のアンダーパニエを製作し効果を得た。実習上では、スカートのドレープを形成する際膨大なパニエを使用する為に、ピンワークしにくい。当然、蹴回し寸法も大きい事から立体裁断は困難で、タック操作とシャーリングを併用する等、縫製上の技法を駆使した。

完成の写真を観察すると飾り布の皺がみにくい。これは、ズーラタフタフタの材質にもよ

るが、装飾用のチュールレースが、白・黒共にレーヨン100%であり加えてブレードもレーヨン100%である為、重みが加って垂れ皺が出来たと思われる。また、写真撮影が2週間展示の後と云う事もありクリノリンの張りも少し押えられた様である。そこで着装期間によっては、縦針金の使用も検討することが望ましい。

以上のような考察から、次のように要約される。それは感性に支えられたデザインの把握、また一方においては素材に対する科学的な応用も関与し、現代の人工素材を用いても、原画の様な風合いのドレスを引き出すことが出来たと思われる。また染色化学と相俟って製作できた髪飾りやコーサージュは、当時のイメージに装飾出来全体的には、原画に近似している事から技法上の成果はあったと思う。

終りに、紙面の都合で研究過程および結果の詳細について割愛したことを付記する。

参考文献

1）丹野郁：服飾の世界史
2）南静：パリモードの200年
3）深井晃子（訳）：The Undercover Story
　前畑典子（〃）：〃　　〃　　〃
4）セシル・サンローラン（深井晃子訳）：女の下着の歴史
5）R・ターナー・ウィルコックス（石山彰訳）：モードの歴史
6）中尾喜保：女のかたち
7）中尾喜保：被服のためのキネジオロジイ
8）FASHION PLATES
9）石山彰解説：ファッションプレート全集

石　橋　設　子（本学卒業生）
山　本　　政（本学教授）